

小学校だより

2025年
2学期号

2025.12.23

Vol.
160

特集

秋の遠足

委員会報告

P.4

学期の行事

P.5

学年トピックス

P.6
P.17

PTA

P.18
P.19

2学期の思い出

P.20

三本のメタセコイア？

学校の謎を解く

校長 相川 保敏

小学校の正門から未来橋までのスロープを見上げると、まっすぐに伸びた高い一本の木が目に入ります。皆さんも知っているように、小学校のシンボルツリーと言える「メタセコイア」です。ところで、この二本の木の根元に、もう一本の別の木が隠れるように立っているのを存じてでしょうか。メタセコイアを切った後の切り株のようにも見えます。近づいて見てみると、二本の木の間にまっすぐ立っています。じっくり見てみると、枯れた木のように灰色を帯びています。枯れ木かなと思って触ってみると、木には固く感じます。叩いてみるとコンコンという音がします。木に間違いはないのですが、石のようでもあります。これはいったい何なのでしょう。この謎の木について調べてみることにしました。



まずは、小学校のあゆみが記されている「六十年のあゆみ」から探っていくことにしました。「六十年のあゆみ」は梶山小学校開校六十周年につくられたもので、昭和二十七年から平成二十三年までの主な出来事が綴られています。やみくもに調べてもわからないので、二本のメタセコイアの間にあることから「メタセコイア」という言葉を手掛かりに調査を進めていきました。一ページ目から順番にめくっていくと、一九六〇（昭和三十五）年度に「一月十日メタセコイアの苗と化石の寄贈を受ける。」と記されています。「化石」。化石っていったい何なのでしょう。そこで、もっと古い四十周年につくられた「四十年のあゆみ」を調べてみました。一九六〇年「1・10メタセコイア化石設置メタセコイア苗木植樹」と記されていました。学校に「メタセコイアの化石」があったということ。長年梶山小学校に動いている石川教頭先生に「メタセコイアの化石」について知っていますか？と尋ねてみました。教頭先生は「よくわかりませんが、松原先生ならご存じかも。」と助言をもらい、前の教頭先生の松原先生に聞いてみることにしました。松原先生は理科の先生なので期待しながら尋ねてみました。すると、松原先生は「それはメタセコイアの木と木の間にあるものではないでしょうか。」と答えてくれました。とうとう、謎の木の正体が分かりました。これは、メタセコイアの木の化石だったのです。



メタセコイアの木はそもそも、それ自体が「生きた化石」と呼ばれています。植物学者の三木茂博士が約千万〜百万年前の地層から採取したセコイアという木の化石を研究していた際に、通常のセコイアとは異なる木があることを発見しました。そしてこの木をメタセコイア（メタは「後の」という意味）と名付けました。この当時メタセコイアはすでに絶滅してしまったものと考えられていたのですが、その五年後の一九四六年に中国で生きたメタセコイアの木が発見され、絶滅せずに原生のまま生き続けていたことから「生きた化石」と呼ばれました。一九五〇年メタセコイアの苗木が日本に十本贈られ、その内の一本を三木博士が親木として、さらに苗木を殖やして全国各地の希望者に配布しました。一九六〇年に梶山小学校に寄贈されたメタセコイアの苗木も、同じルーツだと考えられます。

ここで、再びメタセコイアの木の化石に目を向けたいと思います。木の化石は「木化石（もくかせき）」と呼ばれます。木が化石になるには一般的に、数十万年〜数百万年と言われています。もしかすると、本校のメタセコイアの化石も人類が誕生する前のものかもしれません。「木化石」の中には、木の組織が二酸化ケイ素に置き換わって保存される「珪化木（けいかぼく）」と呼ばれる種類もあります。岐阜県美濃加茂市には、メタセコイア珪化木があり、県の天然記念物に指定されています。本校のメタセコイアの化石の成分も調べたくなってきました。

二本だと思っていたメタセコイアは、化石を入れると実は三本で、ずっとずっと、そのずっと昔のご先祖様を、今に生きる二本の背の高いメタセコイアたちがしっかりと支えているように見えてきますね。

学校にはまだまだ謎があります。

